人肉ショップ
作者
大黒達也

『人肉ショップ』

作者　大黒　達也

一．あらすじ

都会の中心部にその店は人知れず存在した。美女達は、人肉売買組織に拉致され、その店に卸された。様々な調理法で料理され貪り喰われる。

主人公である太田健一の憧れの美人教師は、人肉密売組織に捕らえられ、人肉販売店で売買される。

二．登場人物

大田（おおた）　健一（けんいち）

高校生。インターネットで見つけた人肉ショップに出かけ、思いがけない人物に　　出会う。

高橋（たかはし）　ひろみ

高校の英語教師。二十三歳。美しく理知的な容貌の持ち主。学校帰りに人肉ショップの捕獲人に囚われ、売りに出される。

恵美（えみ）

人肉ショップの従業員。モデルのような美貌に美しい肢体を持ち、男でも女でも抱けるバイセクシャル

『本編』

第一章　はじまり

いつになく、蒸し暑い土曜日の午後三時。

俺は、昨夜、インターネットで、見つけた人肉ショップに出かけることにした。半信半疑ではあったが、暇つぶしにと思っていた。

そこは、新宿歌舞伎町の一角にあった。ひとどおりが少なく薄暗い感じの路地の奥に、目指す人肉ショップが、ひっそりとした感じで建っていた。

鉄筋コンクリート五階建ての造りで、側に立って見上げると臼雲の合間からギラギラとした太陽が見え隠れしていた。白壁には、蔦が這うようにして、伸ばし放題になっていた。

鉄製の重い扉を押した。音も無く開いた。耳を澄ませたが、何も聞こえなかった。

一歩踏み出そうとしたが、なかなか踏ん切りがつかなかった。人肉ショップなんて、ジョークに決まっていた。どうせビルの中は蛻の殻か、怖いお兄さん達が現れるかのどっちかに思えた。

懐には、三十万ボルトのスタンガンと、ハンティングナイフを忍ばせていた。

ゆっくりと前に踏み出した。裸電球によって照らし出されたウナギの寝床のような廊下を、奥へと進んだ。

「いらっしゃい！」

突然、声をかけられた。見ると、廊下の奥に男が立っていた。五十代くらいの中年男で、パンチパーマにアロ

ハシャツを羽織ったいかにも貧相な感じの男であった。

「お客さん。ラッキーだよ。いい女が入ったんだ。高校の英語教師だって。若くてピチピチしているよ。味は最高だろうね」

不気味な笑いを浮かべながら、斜視がかった目でウィンクした。

「本当に若い女の肉が食えるのか？」

俺は身体の芯が疼くのを感じた。

「もちろんだよ。お客さん。がっちりとしたいい身体しているけど、スポーツかなんかしてるの？それに随分と若そうだ」

「関係ないだろう……。俺、あまり金無いんだ」

「ここは分割がきくから、心配ないよ。担保さえ入れて

くれたらね」

男はずるそうな笑みを浮かべた。

「担保？」

「恵美。お客さんだ。担保を取ってくれ」

男は、それには答えず、廊下の奥に向かって言った。

すぐに、白衣に身を包み、二十歳を少し過ぎたばかりの女が出てきた。容姿は悪くない。くりっとした大きな瞳で俺の全身を舐めるように見詰めた。無言のまま、唖然と佇む俺の手を取り、廊下の奥に導いた。奥には、ふたつドアがあり、左側のドアを開けた。中は病院の診察室のようだった。部屋の中央には診察用ベッドが置かれており、さらにその奥は手術室のように見えた。

「ここに、仰向けに寝て」

俺は、不承不承のまま、ベッドに横たわった。

女は、俺のベルトに手をかけ、俺の瞳を見詰めた。

「あんた若いわね。若い男もけっこういい値で売れるのよ」

「どういう意味だ？」

「担保を取るっていったでしょう。貴方自身が担保よ。調べさせてもらうわ」

俺は全身の力を抜いた。女は、てきぱきとした手際で、俺のズボンを降ろし、パンツを脱がせた。女の瞳が、輝いた。若い女に見られるということを想像するだけで、感じていた。既に怒張していた。女は、陰毛の森から、屹立した男根に、白魚のような指先を絡ませた。

「いいわ。色艶も最高級ね。高い値で売れるわよ」

女は、言いながら、白衣を脱ぎ捨て全裸になった。男根に頬擦りし、パクリという感じで口に含んだ。口中で舌先を男根に絡ませた。既に限界に達していた。　俺は「うっ」と呻き、女の口中に放った。女は一滴ももらすまいと、激しい勢いで吸った。

「美味しかった。合格よ」

女は、ベッドで余韻に浸っている俺の顔に跨った。女の股座から隠微な匂いが漂っていた。

「今度は貴方の番よ。楽しませて」

俺は仕方なく舌を使い始めた。濡れ濡れの膣肉に舌を差し込んだ。

「一応、ここのシステムを紹介しておくわね。ああ……。そこよ。アンタ若いのに上手ね。店には、食用の女が十

人いるわ。昨日までは二十人だったんだけど、中国人が大量に買い付けていったの。お祭りがあるらしいのよ。それでね。相場は百万から三百万よ。お持ち帰りも可能だけど、ここで食べていくわよね。このビルの地下に調理場があるから、そこを使えばいいわ」

女はひととおり説明した後で、騎上位になって俺から精液を搾り取った。

「恵美と呼んでね。貴方は？」

「大田健一。健一でいいよ」

第二章　人肉売り場

俺と恵美は、階段で地下２階に降りた。照明といえば裸電球のみの薄暗い廊下を歩いていた。恵美は俺の手を

引いて、足早に歩いた。廊下の突き当たりに鉄製の大扉があった。恵美が、持っていたカードをドアにかざすと、音も無く開いた。

「着いたわよ。どれでも好きなのを選んで」

中は、生鮮食料品を扱うスーパを小型にしたような造りになっていた。入り口近くに新鮮な野菜や果物が所狭と並べられていた。恵美はごく普通の買い物用カートを押しながら、俺の横を歩いた。白菜やネギやリンゴや梨等の野菜や果物を無造作にカゴに入れた。俺には、この雰囲気が馬鹿馬鹿しくなっていた。

「これのどこが人肉ショップなんだ」

「野菜を食べなきゃ駄目よ。肉類は奥にあるのよ」

「ギャー！」

その時、店の奥から女の絶叫が聞こえてきた。俺達は足早に、奥へと向かった。

そこには七十歳過ぎに見える老夫婦が、立っていた。彼らの前には、首を切断された全裸の女が、長さ２メートルほどの長さの俎板に載せられていた。

丸々と太った中年男が、その巨体を調理服に包み、刺身包丁を手にして、女の腰を掴んでいた。包丁の切っ先

を胸元から入れ、下腹部のところまで一気に引き裂いた。湯気をあげる色とりどりの内臓を掴み出し、近くのバケツに投げ入れた。

「レバーと心臓は捨てないでちょうだい」

老妻が興奮した面持ちで言った。中年男は、てきぱきとした手際で、尻肉や乳房や腿肉等を手早く削ぎ落とし、包装紙に包んで、老夫婦の買い物カゴに入れた。

老夫婦は、調理人に軽く会釈すると、その場を何事も無かったように立ち去った。

残されたのは主要な部分を切り取られ、手足や内臓を抜かれた上半身だけとなった。俺の身体は、自然にガタガタと震え出した。床に転がっていた女の生首を見詰めた。女の死に顔は、意外なほど美しく、両目を開け、ま

だ生きているようにさえ見えた。恵美が震えている俺の股間を掴んだ。

「怖気ついたの。契約解消はできないのよ。そのときは私が貴方を買って食べてあげようかしら」

俺は、生きたまま、恵美に男根を貪り食われている様子を想像した。

「あの女の残りの部分は、どうするんだ？」

やっとの思いで聞いた。

「従業員の食事に使われるのよ。最高に美味しいんだから」

思い出したように上唇をペロリと舐めた。さらに、奥に行った場所に、人だかりができていた。長さニメートルはある俎板に、若く美しい女が全裸姿で横たえられて

いた。調理服を着た中年女が、細身の包丁で女の太腿を捌いていた。切り取った腿肉を薄くスライスし、トレイに盛り付けていた。赤みの肉を、ワサビ醤油につけて、爪楊枝に刺して、回りで見ていた買い物客に手渡した。太腿の薄切り肉は飛ぶように売れていた。

女は、薬でも打たれているのか、泣き叫ぶわけでもなく、呆然とした表情で天井を見詰めていた。

「さあ。今日は、創立十周年の謝恩デーだよ。この女は、今朝、仕入れたばかりのピチピチギャルだ。都立女子大生の十八歳だって。どうだい。このおま＊この色艶のいいこと。極上物だよ。グラム千円にまけとくから。そこのお兄さん。どうだい。試食してみないかい？」

俺は差し出された赤み肉を受け取り、恵美の方を見た。

「遠慮しないで、食べてみたら」

意を決して口中に放り込んだ。最初の印象は甘味があるということだった。口の中に上品な肉の甘味が広がった。正直なところオオトロよりも美味いと感じた。ふと俺は、誰かの視線を感じた。目の前で捌かれ、刺身にされている女が、潤んだ二重瞼で俺のことをじっと、見詰めていた。目元から大粒の涙が、流れていた。

「た……、助けて下さい。お願いです」

蚊の鳴くような声で囁いた。

「煩いね。お前は肉なんだから、口をきいちゃいけないんだよ」

中年女は女の声帯を、一気に切断し、うつ伏せに寝かせ、盛り上がった白い尻に刺身包丁を差し込んだ。手早

い手付きで尻肉を削ぎ始めた。

俺達は、その場を離れ、さらに奥へと進んだ。

「どうやって、女達を手に入れるんだ」

恵美に歩きながら尋ねた。

「たいていは、誘拐よ。専門の捕獲人がいて、渋谷の町なんかを流しているわ。　借金で首が回らなくなり、無理やりここに連れて来られる女もいるわね。お金ではなく、本当の意味で、身体で返すのよ」

「よく。捕まらないな」

「警察のこと？大丈夫よ。組織の手口は巧妙なの。何の手がかりも残さないわ。それに人肉が公然と取引されているなんて、誰も本気になんかしないわ」

「恵美もよく食べるのか？」

「ええ。社員食堂があるんだけど。安く食べられるの。やっぱり、若い女の肉は最高に美味いわね。聞いた話によると子供の肉が最も美味いらしいけれど、私は嫌ね」

「何故？」

「だって。エロくないもの。成熟したおま＊こやちんち＊を食べるときは濡れるわ。それにね。子供の肉には手を出さない決まりなの。子供が行行方不明になったら警察が動くでしょう。二十歳ぐらいの家出女なんて、珍しくもないし、誰も、探しはしないわ」

目的の肉売り場には、既に二人の先客が着ていた。ブランド品を身に付けた婦人が二人、高さニメートル、幅十メートルはあるガラスケースを覗きこんでいた。俺もガラスケースに近付いた。

中には、後ろ手に手錠をはめられた全裸姿の若い女達が、白色の陳列台に、仰向けやうつ伏せの姿勢で並べられていた。女達は皆、一様に美人で、豊かなボディの持ち主であった。陰毛は剃られ、膣やアヌスにバイブレータを挿入されていた。

女達はいき続けているのか、一様に惚けた表情で、腰を淫らに振り続けていた。女達の首には、赤いベルトがはめられ、白色の数字が書かれていた。

「一番をいただくわ」

先客の婦人が、近くに待機していたがっちりとした体格の店員に声をかけた。

「お客さん。目が高いね。あの女は真由美といって、女子大生でミス何とかにも優勝したことがあるんだって。

背も高いし、出るとこは出ているから、食べる前に、けっこう楽しめるよ」

「そうね。料理する前に、女の味を覚えさせるのもいいわね」

「好きだね。お客さんも」

愛想笑いを浮かべながら、一番のガラスケースを開けた。真由美の膣やアヌスで蠢いていたバイブレータを抜いた。

「……」

真由美は我に帰ったように、あたりを見回した。俺と偶然、目が合った。

「助けて。お願い……」

空ろな視線で、呟くように言った。

中年の店員が、しみ一つ無く、豊かな肢体を持った真由美を抱き上げ、買い取った婦人の買い物カゴに、尻から下ろした。真由美の豊満な尻が、買い物カゴに納まった。長くむっちりとした太腿が、大きく開かれ、サーモ

ンピンクの膣が丸見えになった。婦人は、真由美の豊かに盛り上がった乳房を鷲掴みにし、空いている方の手を真由美の股間に入れ、指先を膣に挿入した。

「止めて……。お願い……」

真由美はさめざめとすすり泣いた。婦人の顔が欲情のためか、醜く歪んでいた。

「何。言っているんだい！お前は私に買われたんだよ。どうやって食べて欲しい。刺身でもステーキにでもしてやるよ。それにしても若い女の肌って最高ね。おま＊こだって締まりがいいわ」

婦人は嬉しそうに言いながら、腰を屈め、真由美の股間に顔を入れた。すぐにピチャピヤと膣を舐る音が聞こえてきた。

「うーん。たまらないわ。この匂い。もう駄目。この店に休憩室があったわよね。どこなの？」

「この奥ですよ」

店員がウィンクを送った。婦人は真由美を乗せた買い物カゴを押しながら、急ぎ足でその場を去っていった。

「さあ。選びなさいよ」

恵美が俺の手の平を握りながら、言った。

「さっき。おっさんが言っていた高校の英語教師っていうのはどいつだ？」

「あんた。高校生でしょう。生徒が先生を食べるわけ？いいわ。ほら、そこにうつ伏せになっている女よ」

俺は恵美が指差している女を見詰めた。盛り上がった白い尻が妖しく動いていた。バイブレータがアヌスから

突き出ていた。

俺は近付き、女の全身を舐めるように見詰めた。しみひとつなく、腰がきゅっと締まり、形のいい長い足を持っていた。うつ伏せなので、胸の状態は分からないが、脇から乳房がはみ出していた。

「気に入った？十番はね。高橋ひろみと言う名前でね。都立高校の英語教師なのよ。年端は二十三歳よ。女の私から見ても、きれいな身体をしているわ。もちろん。美人よ。この女に決める？」

「顔が見たい」

俺は、やっとの思いで、そう言った。店員が、ガラスケースを開けて、ひろみを仰向けにした。

「先生！」

思わず、叫んでいた。陰毛を剃られ、膣を剥き出しにして、バイブレータを入れられている女は、紛れも無く担任の高橋ひろみだった。さっきから、何となくそんな気がしていた。恵美の口から高橋ひろみという名を聞いたときには、思わず声が出そうになった。ひろみは、ぼんやりとした視線を、俺に向けていたが、急に両目を大きく見開いた。

「健一……。貴方。健一君よね。お願い。助けて……」

「へえ。あんたの先生だったんだ。偶然っていうのはこのことだね。教え子に食われて本望だろうよ」

恵美は冷たい笑みを浮かべながら、ひろみの膣に刺さったバイブレータを乱暴に動かした。

「あああ……。やめて、お願い」

「生徒の前でヨガリまくりかい？本当に淫乱な女だよ」

「見ないで！健一君」

見るなと言われても、無理な話だった。ひろみは俺の憧れだった。ひろみが担任になってのこの半年間は、懊悩の日々だった。授業のとき、ミニスカートから見える太腿が眩しかった。いつもスカートの中に頭を入れて、ひろみの膣やアヌスを舐めることを想像していた。教壇に立ち、黒板に書いている姿はさらに刺激的だった。豊かな尻が、動くのを見ているだけでいきそうになった。

カニバリズムに興味を抱いたのもこの時期だった。インターネットで見つけたサイトで、人が人の肉を食べる行為に興味を持った。要は、ひろみの肉を食べたかったのだ。すべて自分のものにしたかった。

「どうしたんだい？ぼんやりして」

「何でも無い。この女に決めた」

俺は絞り出すように言った。ひろみは呆然とした表情で俺を見上げていた。店員が、ひろみを抱き上げ、カートに載せた。

「調理場は、こっちよ」

「……」

「あんた。初心者だから、私がエスコートしてあげるわ」

満面の笑みを浮かべ、ウィンクを送ってきた。俺は、カートを押しながら、仕方なく、恵美に続いた。エレベータを使い、地下二階に下りた。その間、ひろみは一言も口をきかなかった。案内された調理場は個室になっていて、長さニメートルはある俎板が載せられた調理台が

あり、棚には鍋やフライパンが収納されていた。

残りのスペースには、食卓テーブルや冷蔵庫、それにダブルベッドやソファがあり、バス・トイレも備え付けられていた。

「健一。手伝って」

二人で、ひろみをダブルベッドに横たえた。目の前に憧れのおま＊こが、剥き出しにされていた。股間が痛いほどにいきり立っていた。

俺は堪らず、膝間付き、むっちりとした太腿に顔を押し込んだ。そこはバイブレータによる刺激のためかヌルヌルになっていた。

「嫌！やめて。お願い」

俺は、泣き叫び身悶えするひろみのおま＊こを舐めな

がら、盛り上がった白い乳房を、両手で揉みしだいた。

「したいのはわかるけど。下拵えが先よ」

恵美が俺の肩に手をかけた。

「下拵えって？」

俺はひろみの愛液に濡れた顔を上げた。

「腸の中をきれいにするのよ。ウンコ臭いお肉は嫌でしょう？さあ、裸になって、女を浴室に運ぶの手伝って」

恵美は着ていた白衣を脱ぎながら、言った。シミ一つ無く、瑞々しい裸体が露になった。俺は未練がましく、ひろみのアヌスに指を一度だけ出し入れし、立ち上がり着ていた服を脱ぎ捨てた。一瞬、恵美の濡れた視線が俺の股間に、絡みついた。

ふたりでひろみを抱き上げ、浴室に運んだ。浴室はト

イレとガラス壁で仕切られていた。空の浴槽に、ひろみの上半身を落とし込んだ。目の前に剥き卵のように白くスベスベの尻が露になった。

「ケツを舐めて、濡れ濡れにするのよ」

言われなくても俺の身体は自然に動いていた。深い尻の割れ目に顔を押し付けた。ウォシュレットを使っているのか、異臭は感じられなかった。

憧れのひろみのアヌスを思いっきり舐めまわした。舐めても舐めても足りなかった。この美味そうなお尻を丸ごと食したかった。

「健一君。お願い。助けて……。あああ……いい……

…」

ひろみの尻が妖しく動き出した。もう我慢の限度だっ

た。俺は立ち上がり、怒張をひろみの膣に押し当てた。

「本番はまだ駄目よ。もうちょっと我慢して」

「……？」

振向くと、恵美が図太い浣腸器を持って立っていた。

「ケツを広げて」

「チェッ」

俺は舌打ちしながら、ひろみのむっちりとした尻肉を鷲掴みにして、押し広げた。きれいなアヌスが剥き出しにされた。恵美は、指先を挿入し、感触を楽しむように出し入れした。

「いいケツしているよ。この女。脂がのって美味そうだ」

「ああ……。そこは駄目。許して」

ひろみは、嗚咽を漏らした。アヌスが十分に濡れてい

ることを確認し、浣腸器を挿入し、中身を一気に注ぎ込んだ。浣腸器を抜き、かわりに指先を挿入した。すぐに、空の浴槽に上半身を落とし込まれているひろみの尻が小刻みに震え出した。

「お願い。トイレに行かせて」

「雌豚が、ナマこくんじゃないよ。ここで出すんだ。見ものだね。美人の高校教師が教え子の前で糞を垂れ流すんだから」

「……それだけは許して、お願い……」

俺はバスタブ中に手を差し込み、ひろみの重たげな乳房を鷲掴みにして揉みしだいた。手の中でマシュマロのような乳房が弾けていた。

「もう駄目。出ちゃう！」

「もう少し我慢するんだ。それにこの指を抜かないと出来ないだろう」

「あああ……」

ひろみが切なそうに尻を動かした。

「そろそろ。いくよ。健一。シャワーの用意をして」

俺がシャワーの蛇口を捻ると同時に、恵美が指を抜いた。その瞬間、汚物がシャワーのように噴出した。

「嫌！」

「いい眺めだよ。ちょっと臭いけどね」

俺はシャワーで、床を覆っていた汚物を排水溝に洗い流した。ひろみの尻にも注ぎかけた。恵美は、放心状態のひろみのアヌスに再び指先を挿入し、肩に力を入れた。指先を強引に捻じ込み、手首まで押し込んだ。何かを手

探りするように動かしていた。その間、ひろみは低い喘ぎ声をあげ続けた。恵が手首を抜いた。黒い宿便が握られていた。

「ケツに水を入れて、洗ってちょうだい」

俺は、シャワーのヘッドを外し、ホースの先端をアヌスに押し込み、蛇口を捻った。すぐに溢れ出した。水が透明になるまで止めなかった。

ぐったりとしたひろみをバスタブの床に、仰向けの姿勢で横たえた。寝ても崩れない乳房が俺の欲情をさらに煽り立てた。すぐにでも食らいつき、舌で味わいたかった。

「このあたりは入念に洗うのよ」

ひろみのアヌスから膣にかけて、指先でなぞるようにして言った。俺はひろみの膣に顔を近つけ、覗き込んだ。愛液に濡れ濡れになったサーモンピンクの膣が見えた。

「本当にそこは美味しそうよね。半分分けよ」

俺はそれには答えず、ボディソープでひろみの全身を洗い始めた。

全身を洗い清めたひろみを、ダブルベッドに横たえた。

「いいわよ。好きなだけ犯しなさい」

俺はひろみに抱きつき、唇を求めた。

「止めて。健一君。お願い。許して……」

最後まで、言わせなかった。口蓋を舌でこじ開け、ひろみの甘い舌を吸出した。激しい勢いでひろみの唾液を吸った。

「せ、先生……」

俺は思わず、喘ぎ声を上げた。

目にいっぱいの涙を溜め、嗚咽するひろみのおっぱいを鷲掴みにして、乳首を口に含み、音を立てて吸った。むっちりとした太腿を押し広げ、ガツガツとした感じで膣を舐めまわした。ひろみの膣は、言葉とは裏腹に、滑りきっていた。指を入れてみた。中はしっぽりと熱く、俺の指を美味しそうに飲み込んだ。

もう限界だった。ひろみの太腿を両腕に抱え、ズブリといった感じで挿入した。

「あああ……」

ひろみが喘ぎ声をあげ、大きく仰け反った。憧れのひろみのおま＊こを犯しているのだ。ひろみは自分だけの

ものになった。俺も喘ぎながら、腰をひろみの下腹部に叩き付けた。注送を繰り返しながら、ひろみのアヌスを指先で弄った。

「駄目よ。そこは、許して……」

「先生。俺もう駄目だ。出そうなんだ」

「だ……駄目よ。健一君。あああ……。いいい……。いく。先生もいっちゃう！」

ひろみは太腿で俺の腰を締め付け、背中に、爪を立てた。

「あああ……。凄い！ひろみ。いっちゃう……」

俺の分身がひろみの中で爆発した。これまでに感じたことの無い快感が、背筋を走り抜けた。俺のすべてがひろみの中に吸い込まれていくようだった。俺はひろみの

乳房の合間に顔を押し付け、余韻に浸っていた。

「教え子を犯すなんて。この淫乱教師が！」

振り返ると、恵美が、巨大な張形を、装着し立っていた。俺のより二周りは図太かった。

「今度は、私の番だよ。ちょっと休んでいて」

俺は渋々といった感じで、ひろみから離れ、ベッドの端に横たわった。ひろみの視線が、張形に釘付けとなった。

「可愛い雌豚だね。食べる前に楽しませてもらうよ」

「止めて。お願い。そんなことしないで」

恵美は、意地の悪い笑みを浮かべ、ひろみの太腿を極限まで押し開いた。愛液に濡れたサーモンピンクの膣とアヌスが剥き出しになった。膣に先端部分を押し当て一

気に挿入した。ひろみの裸身が跳ねた。

「さ……裂けちゃう！嫌！止めて……」

恵美は嗚咽に咽ぶ、ひろみの唇を奪いながら、腰を激しい勢いで動かした。乳房を吸い、アヌスに指を入れていた。女同士の交わりを、マジかで見るのは初めてだった。男根が痛いほどに、硬くなった。暫くして、ひろみが鋭い喘ぎ声をあげながら、果てた。恵美はそれでもひろみを解放しなかった。うつ伏せにさせ、盛り上がった白い尻を抱いて、アヌスに張形の先端を押し付け一気に挿入した。

「おおお……。うっ……」

ひろみは、髪を振り乱し、苦痛の呻き声をあげた。俺は恵美の背後に回って、丸くスベスベの尻を抱いた。ず

ぶりといった感じでアヌスに挿入した。

恵美がひろみのアヌスを犯し、俺が恵美のアヌスを犯していた。恵美が首を曲げて俺の舌を求めてきた。俺は、恵美に舌を吸われながら腰を動かした。

それから、半日あまり、恵美と二人で、ひろみを犯し続けた。最後には、バイブレータや張形等の器具を使って、ひろみの性器を弄んだ。

第三章　調理場へと続く